

負給ヒヌル、ウタテサヨト云ハヌ人コソナカリケレ、其後浮橋ヲ切テツキ流サレタレバ、敵縦ヒ寄來ル共、左右ナク渡スベキ様モナカリケルニ、略下

〔信長公記十五〕天正十年四月十六日、池田の宿より天龍川へ著せられ、爰舟橋懸被置、奉行人小栗二右衛門、淺井六介、大橋以上兩三人被申付候、抑此天龍川者、甲州、信州、大河集而流出たる大河、瀧下瀧鳴而、川之面寒渺々として、誠輒舟橋懸るべき所に非ず、上古よりの初也、國中之人數を以て、大綱數百筋引はへて、舟數を寄させられ、御馬を爲可被渡なれば、生便敷丈夫に殊に結構に懸られたり、川之面前後に堅番を居置、奉行人粉骨無申計、此橋計之造作成共、幾何之事候、國々遠國迄道を作らせ、江川には舟橋を被仰付、路邊に御警固を被申付、御泊々々之御屋形々々立被置、又路道之辻々に無透間、御茶屋御廐、夫々生便敷結構に被相構、略中家康卿萬方之御心賦一方ならぬ御苦勞、無盡期次第也、略中 信長公之御感悅不及申、大天龍舟橋被成御通、小天龍乗こさせられ、濱松ニ至而御泊、

甲斐國
猿橋

〔東遊記二〕九十九橋
危きは甲州の猿橋

〔甲斐國志五十四〕都留郡郡内領

一猿橋 驛ノ北ニテ桂川ニ架ス、長拾七間、幅一丈壹尺、高欄アリ、一刎木六間四尺、二刎木七間二尺、三刎木八間、四刎木八間四尺、地中ニ入コト又同ジ、行梁ハ九間四尺、次梁ハ六間橋上ヨリ水際マデ拾七間弱、世ニ之ヲ三拾三尋ト云、大概ヲ云ナリ、舊事大成經ニ曰、推古帝二十年、百濟國歸化人有白癩、巧掛長橋、令造遣諸國、三河國八脛橋、信濃國水内曲橋、木斐梯、遠江國濱名橋、陸奥國會津闇川橋、兜岩猿橋等、其外一百八十橋云々、按ニ兜岩カブトイハト訓ベシ、甲斐ノ假名ニラズト雖モ、一時世ニ行ハレシ、書ナレバ、姑ク此ニ記スノミ、古人云、此地末架橋以前ハ、ビク島ト云キ、鳥澤ヨリ渡船ニテ藤